

1 はじめに

今回、私たちは北欧の地スウェーデンにおいて、かけがえのない最高の体験をすることができました。これは、この事業に向けてコーディネートして下さった岡崎市国際交流協会の皆様、ウッデバラ市役所の方々、現地で我々を迎えてくれたホストファミリー、通訳のアールリンド親子、何事にも臨機応変に対応してくれた同行したメンバー、関わってくれた方々全員のおかげである。文化・習慣の違いに最初は慣れないこともあったが、スウェーデンの地は温かく我々を迎え入れ、多くの感動と気付きを我々にもたらしてくれた。この旅に関わった全ての方へ感謝をしながら、本事業の報告をまとめたいと思う。

2 本事業について

今年には日本―スウェーデン国交150周年、岡崎―ウッデバラ市姉妹都市提携50周年の記念すべき年である。この年をきっかけとし、新たに両市の高校生が学校生活とホームステイを通して、国際理解を深め、両市の友好関係をさらに深める交流事業として計画されたものが本事業である。本校では、課題研究「楽天 IT 学校」など会社の起業や経営に関することを授業で行っていたことから、平成27年度より毎年、ウッデバラ高校から教師が視察に来校していた。ウッデバラ高校においても経営に関する学科があり、共通する目標があることから、本校から派遣生徒を募集することとなった。校内で募集をかけたところ、8名の生徒の応募があり、校内で書類・面接での選考を行い、4名を決定した。



ノーブル博物館前にて

3 現地での活動

ウッデバラ高校は学ぶ専門科目ごとに校舎が分かれており、日本で言う大学に近い仕組みであった。高校であれば、総合高校に最も近いのではないだろうか。必修科目に加えて各生徒で授業を選択し、専門性を高めていくという中で、最も人気があるのが経済学の分野だそうである。現地では、ウッデバラ高校にて、日本や岡崎市、岡崎商業高校をプレゼンテーションにて紹介し、お互いの国や習慣の質疑応答を行った。また、着物について実演とともに解説し、日本の歌を歌い、意味を通訳者に伝えてもらうなど、さまざまな角度で日本についてスウェーデンの方々に広めることができた。多くの現地高校生が日本に対して興味・関心を持ち、良い交流を行うことができた。現地高校生は特に、日本の高校生活について興味があるようで、制服について必要か不要かをクラス全体で協議したり、チャイムがなく、授業が始まって遅刻してくる生徒がいることが珍しくないスウェーデンの授業の状況をどう思うか、など多くの質問で盛り上がる事ができた。アニメをきっかけに日本について詳しく知っている生徒もおり、クールジャパンの影響力が、遠く北欧にまで届いていることに驚いた。より多くのスウェーデンの方々の心に、日本という国のことが少しでも残ってくれると幸いである。



生徒間交流の様子



ウッデバラ高校内の様子

4 二つの国の違い

驚くべき点としては、ほとんどのスウェーデン人が英語を上手く扱えていた。もちろん高校生においても同様である。日本も第2外国語として英語を学んでいるのにもかかわらず、この違いは何かを現地高校生に聞いたところ、単純に圧倒的な学習量の違いがその結果をもたらしているようであった。英語学習を始める年齢は、小学生に入る前から始める家庭もあり、小学生からは全員学ぶとのことである。また、TV番組で英語のみの番組も多く、多くのスウェーデン人が幼少期から積極的にそういった番組を見るように努めている。さらに、母国語であるスウェーデン語、英語以外にも一言語学ぶ必要があり、ホストファミリーを務めた生徒はスペイン語を身に付けていた。そもそもスウェーデン語も英語もゲルマン語派(Germanic)であり、文法は違えど、派生元の祖語が同じことから学びやすいという点があるのは確かである。例えば、thanks(英語)と tack(スウェーデン語)、day(英語)と dag(スウェーデン語)などだ。しかし、それをふまえても、日本に比べ、言語学習に対しての意識が明らかに高い印象を受けた。

日本では2020年に小学3年生から必修、小学5年生から教科化を控えているが、それでも遅いのではないかとすら感じた。近隣の国で言えば、韓国ではすでに1997年から小学3年生からの必修を行っており、その結果、韓国内での英語力は大きく向上した結果が出ている。こういったことも、実際に海外に出て日本と異なる文化と交流して始めて気付くことなのだろうと感じる。日本が2020年向け、海外留学生を増加させようと留学に関する事業を多く展開しているのも、こういった気付きを若者に早い段階から体験させるためなのだろう。

また、福祉社会であるスウェーデンの施設や、人々の生活を見て、日本はどうなのだろうと考え直す場面が多く、帰国後、恥ずかしながら日本の税制について勉強し直した。現地で日本について聞かれても、自信を持って答えられない場面もあり、海外へ行くことで日本のことをもっと知らなければならないことに気付かされた。

5 おわりに

本事業における生徒の成長は著しいものを感じた。彼女たちの心の中には、一步踏み出す勇気の重要性和、全てにおいて受動的ではなく自発的行動がより必要であることが、学べたようである。スウェーデンの高校生たちの自立した様子や、信念を持って活動していることを間近で見られたことで、日本では得られることのない体験ができた。今回が第1回目の事業であったが、今後もこの事業が続き、多くの高校生がスウェーデンでの交流に参加できることを心から願う。また、ホストファミリーのトーマス夫婦は本当に親切で、最高のもてなしをしてくれた。直接的なお礼を今後することは難しいが、今後、スウェーデンから岡崎へ学校訪問などがあつた際には、こちら最大限のおもてなしをし、お世話になった方々への御礼としたいと思う。



通訳のケビンとフィンランド空港にて